

博物館と社会的機能

Museums and Their Social Functions in Japan

濱田隆士・高橋俊雄・松島義章・奥野花代子

Takashi HAMADA, Toshio TAKAHASHI, Yoshiaki MATSUSHIMA & Kayoko OKUNO

Abstract. Developmental history and the current aspect of the Japanese museums in relation to the social functions are summarized to point out the special recognition of the role of the museums as an imported culture from abroad in the early stages. The original situation in the dawn age of the Japanese museums is strongly affected by an intention to show the national dignity to the foreign countries all over the world. After that the museums became popular in this country and evolved to play an important role to promote the social condition, *i. e.* social education, life-long education and informal education.

The natural history museums are much concerned with the nature conservation in the modern world. Collection of the museum items to be studied and also to be displayed have been severely restricted in natural materials. Therefore, introduction of the technical innovation of plastic replicas seems to become one of the main motion of museum management. Nothing to say that the museums have to be opened to the public in a wide sense. Visual presentation has, however, been too much applied to the museum display. Nowadays we must care about this situation to prevent an inconvenience of the people who bears some handicapped conditions.

Barrier-free policy has, then, become popular in the society via hands-on method, a sort of normalization, and is evolving to the universal presentation to all the people who are interested in the museum items and activities. Here, we call this social trend as the B-N-U evolutionary series of the museum management concept.

Generally speaking, museum management stays still in an insufficient status in Japan. The financial difficulties to keep enough staff and collection of specimens may be the most severe condition. This is mainly caused by a certain poor system in the social education of the country on one hand, and partly by a great diversity of the museum situation on the other. Natural history museums have to contribute not only to the local society in various ways of life-long education but also to promote better understanding of our planet, the earth.

The museum services to the society in a wide sense must therefore be much developed in the forthcoming 21 century to satisfy the cultural function for the society.

Key words: Museum development, museum items, barrier-free, normalization, universal, social function, museum management, plastic replicas, B-N-U series, museum services.

濱田隆士 (Takashi Hamada)
神奈川県立生命の星・地球博物館
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田 499
Kanagawa Prefectural Museum of Natural History
499, Iryuda, Odawara, Kanagawa 250-0031, Japan
高橋俊雄 (Toshio Takahashi)
神奈川県立生命の星・地球博物館
松島義章 (Yoshiaki Matsushima)
神奈川県立生命の星・地球博物館
奥野花代子 (Kayoko Okuno)
神奈川県立生命の星・地球博物館

I. まえがき

神奈川県立生命の星・地球博物館は、1995年3月20日の開館以来、本年度で丸5年を経過しようとしている。歴史ある神奈川県立博物館の再編整備により、歴史博物館と自然史博物館の性格の当館の2館が県立博物館として併存することになった。再編整備計画は、その時点より約8年前からの長年月をかけて慎重に練り上げられ（神奈川県教育委員会，1988，神奈川県立博物館整備構想懇談会，1988）、わが国における博物館建設ラッシュの中、準備室による作業は日本の代表的自然史型博物館であることを目指すと同時に、“開かれた”近代的博物館として社会との関係をどのように保ち、いかに貢献できるかをターゲットとして計画が進められた。

結果として、バブル経済がはじけ、財政的に低迷期の真最中にオープンすることになったが、理念は貫き通し、“開かれた博物館”であり、グローバル視座をもった地域博物館であるべく努力がさらに重ねられてきた。

日本の博物館は、明治開化期での産物として輸入学、輸入文化としての色彩を濃く有してきたものであるから、その近代化はただ単なる展示手法や技法のメカニカルな変更にとどまるのではなく、高度情報化社会、生涯学習時代という二つの大きな流れを受け、それをいかに有効に消化し、博物館の独自性を発揮できるかが鍵となった。

そもそもわが国における自然史学は、いわば変則的な発展の道をたどってきており、中国からの本草学の移入、文明開化時における諸外国からの博物学の導入、そして、追いつけ、追い越せの背伸び型文化高揚策の中に位置づけられたのである。ところが、近代科学の激しい学問分野の分化・深化の流れの中であって、どちらかといえば保守的な分類学を代表とする博物学は、博物館でだけ生き延びる運命となり、大学や教育・研究機関との緊密な連携は急速に薄れていった。

社会的には戦後の図鑑ブームが、実は一般人の心の底に潜在的に残っていた自然史型発想を強く刺激し、その延長線上に近年のアウトドアライフ、ダイビングブーム、RV車全盛等が位置づけられ、ついに水族館人気時代に至る。数千～万トン級展示水槽とその水質管理システムの発達が火付け役ではあるが、支える側としての一般大衆の意識の向上や管理社会での生活からの逃避としての自然を求める深層心理がこれに活性を与えるという機能を果していると見てよい。

さらに最近では、学校教育制度のかかえるいろいろな問題点が顕在化し、家庭内での子どもたちの成長過程にも陰を落とすようになり、“教育”よりもっとゆるやかな“学習”の有効性が認識されるようになって、いわば学校外、教室外学習にかなりの重さをかける方策がとられ始めていて、その中に、“自由にメニューを選べる”体感学習の場としての博物館の存在価値・利用価値が認められるようになってきた。学習からさらに進んで、“楽修”（エデュテインメント）のあり方も幅広く受けとめられる今日、一方ではパソコンゲーム、他方では虫探しという“大人の世界”では大きく乖離したと考えられがちな子どもたちの好奇心発揚形態が重視されねばなら

ない時代といえる。

子どもたちの“理科嫌い”、大学生の“科学離れ”現象は、彼らの世界を外から眺めた“結果の心配”から事態を皮相的に捉える大人や“関係者”の偏向的観測であるとかえ極言されてもしかたない。この大切な時代の子どもの学習環境を提供し、かつまたいつでもどこでも誰もが楽しく過ごせる生涯学習時代の、旧くて新しいメディア役として博物館が現代社会でいかに機能すべきか、神奈川県立生命の星・地球博物館発足5ヵ年の成長過程を軸にしながら論じてみたい。

II. 博物館成立背後略史

1. 輸入文化としてのパイオニア性

わが国における博物館界の開闢やその後の展開の詳細については、いくつもの専門的な記述が公表されているので、ここにそれを繰り返すつもりはない。本章で扱いたいのは、いわば博物館のコンセプトあるいは考え方、視点の遷り変わりである。

そもそもわが国に自然史（誌）学が存在していたのかどうか、という議論も必要かもしれない。一般には中国伝来の「本草学」が一つの形として成り立っていたとし、それは薬石から愛玩石、奇石の類まで幅広い対象をもつので、いわゆる自然科学のジャンルではなく、むしろ物産学として解されてきた。神社・仏閣の“宝物殿”が珍奇物品の収集・保管に大きな役割を果たしているのは寺社史に明らかな通りであり、しばしば化石・鉱物類のコレクションを含む。これらには後世に至って分類学的な注釈が与えられることが多く、したがって、発足当初は“自然科学的”資料とは評し難い事情にあったと考えられる。

これらに対して明治の文明開化期に設立された“帝室”を冠した博物館・美術館類は、国の威信をかけての大上段に降りかぶったショウアップ施策であったと断じてよからう。博物館先進国としての諸外国の例を見るにつけ、歴史の重みを先達は感じたに違いない。その結果、“国宝級”というファーストランクの物件を中心に博物館事業が進められたことは想像に難くない。したがって、館収蔵品の主体は逸品揃いとして、とり敢えず諸外国に自慢できるものになった一方、日常の生活文化を支えるアイテムについては、ほとんど陽が当たらない結果を生むに至ったといえる（木村，1985；小泉，1943，白井，1908）。

そうした経緯の中であって、ナウマン（Edmund Naumann）以前に在日し、森鷗外らに進化論を講じたり、市場や盛り場での市販品を集めて自然科学的記載を進めていたドイツ人ヒルゲンドルフ（Franz Hilgendorf）の存在は注目に値しよう。立場によってやや議論はあるものの、ヒルゲンドルフがわが国の魚類学、漁業学のパイオニアであったことについては大きな異論はあるまい。矢島道子（1998）が個人的な学史発掘研究を故阿部宗明博士から引き継いでの日本初の個人提案企画を、当館を含む複数博物館の深い理解と協力のう え持ち回り特別展（ヒルゲンドルフ展企画実行委員会、



図 1. ヒルゲンドルフ展を御観覧中の天皇、皇后両陛下 (1998. 3. 30).

1997) にまで展開させ得たのは、博物館史と共にわが国の自然史学に対しても有益であったと思われる (図1)。

ヒルゲンドルフのコレクションの範囲はすこぶる広く、ミズムシから魚、カワウソ、カモシカ、毛髪に及び、解剖学者、古生物学者としての面目躍如である。そうした収集標本類を確実に整理・保管する“場”をもたなかった彼は、大半をベルリンへ持ち帰って、それらと日本からベルリン産業博覧会に出品された魚類標本などと共に、今日まで立派に保存しておけたという経緯そのものが、博物館の有無、研究者の有無という点からみてわが国自然史出発時の彼我両国の文化的力量差をよく表している。

シーボルト (Philipp Franz von Siebold) の『Fauna Japonica』や『Flora Japonica』の成立などにも、おそらく全くよく似た事情が背景にあったと考えてよからう。今日においても多くの模式標本がヨーロッパ各地の博物館に散在保管されていることがそれを物語っている。日本産の生物・古生物が外国研究者によって多数記載されたにもかかわらず、標本を確実に収蔵する発想も施設も保有しなかった日本の立場はまさにわが国のプレ博物館時代の悲しい特性と考えてよい (ヒルゲンドルフ展企画実行委員会, 1997)。

自然史研究、さらには自然史博物館の発展に直接結びつく多彩な標本収集活動が、多くの外国人研究者によって進められてきたことは、どれほど強調しても足りないくらいである。とりわけ、海洋生物に関しての調査船による各大洋での組織的採集活動が、後々に分類学上のみならず、生物分布学、生物地理学の発展に寄与するものであったことは、大きく評価されねばならない。

このような流れの中で異彩を放っているのは、日本の地図学の真の開祖として近年一層の光を当てられている伊能忠敬の業績である。彼は1800年 (寛政12) にすでに北海道の測量を行い、立派な地図を作っている。ベンジャミン・ライマン (Benjamin Lyman) が1876年に北海道の地質図を出しているが、その原図は伊能のものである。1868年が明治元年であるから、伊能の実力がいかに素晴らしかったか、現代の「地図」の情報論的性格付けから明らかなように、地図は地質学を育て、自然界の様々な要素をプロットするベースに他ならないので

あるから、ここでは、敢えて自然史基礎を打ち立てた純国産パイオニアとしての伊能忠敬のみに言及しておく。

なお、先進諸国での歴史をみれば明らかなように、自然史 (誌) 博物館の設立・発展と各種の細密画やそれによるモノグラフ・図鑑類の隆盛は、影となり日向となっており、互いに効果的に影響を及ぼし合っている。もちろん、スタートは木版や石版であり、その技術的レベルの高さが支えになっている。それに比して、わが国では戦後、別の次元で生態的図鑑、カラー写真図鑑の市井における高揚期を迎え、今の博物館界の発展にやや先行していた現象となっていることは生活文化史上注目すべきことと指摘できよう。

2. キャッチアップ精神の時代

博物館が存立するためには、言うまでもなく、容れ物と資・試料 (標本類等) とがなければならない。しかし、その前提として、人と組織とを用意しなければならないのが文明開化直後の日本の自然誌研究界の内情であった。もちろん、当時は自然史 (誌) という捉え方ではなく、いわゆる博物学の範疇であった。

“ひと”つまり研究者、ひいては初めての高等教育の責を負う人物の養成には、他の分野と同じく、外国の先進的な空気を吸うために留学というプロセスを挟むことになった。その一断面として、地質学分野での略史をたどってみよう。まずは、先輩国での修業からキャッチアップの動きが始まった。そしてそれは、国内の官庁や開発・研究組織の設立、翻訳を中心とする学問体系そのものの輸入・移植から後続の人材育成へとつながっていった。開闢時を含め、継時的に主要人物と項目とを並べてみよう。約100年をかけて外国人教師から地質学の世界が日本人教師に引き継がれる様子が手にとるようにわかる (表1)。

高等教育の場での日本人研究者の位置づけは、こうした“国産化”の流れを形成したものの、研究内容は結局のところ、大局的にはヨーロッパの垂流から逃れることはできなかったとみてよい。いわゆる教科書に当たるものは全て翻訳物であり、結果として輸入学の消化第一歩が印されたことになる。杉田玄白「蘭学事始」に代表される医学の世界に比べると大幅なおくれと言えよう。ダーウィン (Charles Darwin) の進化論は、“生物学者・解剖学者・古生物学者”としてのヒルゲンドルフによって、東京帝国大学の前身である東京医学校において講じられ、森鷗外が受講している。西欧文明キャッチアップの当時の最前線の様子がライブに伝わってくる。

一方、地球自然環境の各要素やあり方は、自然誌という観点から捉えられるので、自然史 (誌) 科学の近代的な位置づけが大切である。要素還元型発想での分野別ではなく、総合的に自然を見る眼が基本になるから、自然史科学はホリスティックであり、これをいまや新しい総合的枠組みとしての自然史システム科学と捉えることにより、地球環境科学の基本的な切り口が見えてくることになる。自然史科学は本質的に自然史博物館活動の根底をなすものであるから、自然史博物館の資質が、地球環境理解を促進する要因となることは間違いない。

表 1. 明治開化期事情（地質学分野をめぐって）

西 暦	年 号	外 国 人	日 本 人	事 項
1800	寛政12		伊能忠敬	北海道地図
1821	文政 4		伊能忠敬	日本全国測量完了
1823	文政 6	シーボルト来日		
1840		シーボルト		伊能図を西欧に紹介
1867	慶応 3	コワニエ来日		薩摩・生野の金山を近代化
1868	明治 元			
1872	明治 5	ライマン来日		北海道開拓仮学校
1873	明治 6	ヒルゲンドルフ来日		（後の札幌農業学校、北海道大学）
1874	明治 7		（森鷗外、ヒルゲンドルフの 進化論講義を受ける）	内務省に地理班（後の地理局）
1875	明治 8	ナウマン来日		
1876	明治 9	ライマン ミルン来日		200万分の1の北海道地質図（伊能図をベース）
1878	明治11	モース（進化論講義） ナウマン	和田維四郎	東京帝国大学設立 東京帝国大学地質学初代教授 東京帝国大学地質学助教授
1880	明治13	万国漁業博覧会(Ber)	小藤文次郎	東京帝国大学第1期卒業生、内務省地質課に入る
1881	明治14	ミルン主宰		日本地震学会発足
1882	明治15		和田維四郎	農商務省に地質調査所、初代所長
1883	明治16		原田豊吉	ドイツより帰国、地質調査所にへ入所
1884	明治17		原田豊吉 小藤文次郎	東京帝国大学地質学教授（日本人初） ドイツより帰国、東京帝国大学講師
1885	明治18	ナウマン帰国	小藤文次郎	東京帝国大学教授 東京帝国大学に地震観測所（後に地球物理学教室） 日本の地質についての論文
1889	明治22		横山又次郎	ドイツより帰国、東京帝国大学へ
1890	明治23		原田豊吉	日本の地体構造図
1893	明治26	ナウマン		日本地体構造図（フォッサマグナ、中央構造線）
1894	明治27		原田豊吉（37歳没） 横山又次郎	東京帝国大学の教授となる
1900	明治33			

*主として放送大学教材「日本列島の地球科学」（1999）第15章より引用

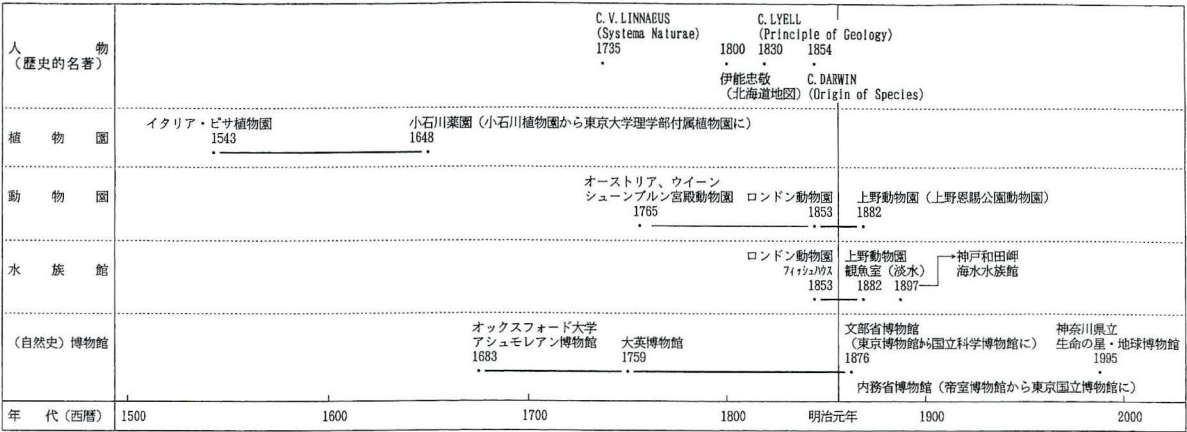


図 2. 各種文化水準事項の発祥時間差 (日本と先進諸国との較差).

ここで、日本の博物館界がそのキャッチアップに、どのように貢献し、いかなる役割を果たしたか通覧しておこう。

図2は、博物館界とそれに関連の深いいくつかの項目について、先進諸国でのスタートとわが国での発祥の時期とのずれを示したものである。文化の後進性というより、まさに輸入学問や輸入制度の導入にいかに努力したか、明治の文明開化時の動きと捉えたい。注目されるのは、自然史関係の分野としては、植物学界のもつ著しい先行性である。植物園の歴史は桁違いに古く、イタリアのピサ植物園は16世紀半ばにすでに存在し、わが国でさえ、小石川御薬園、つまり後の小石川植物園そして現在の東京大学理学部附属植物園となった施設がほぼ1世紀おくれの17世紀半ばには発足して、動物園、水族館と約3世紀のズレが見られるのである。

生物の細密画が、どのジャンルにおいても常に館・園や大学の創立に先行しているのは万国共通の興味ある現象であるが、日本の植物についてもチュンベリー (Thunbery) の業績は、『Flora Japonica』としてシーボルトらの『Fauna Japonica』にほぼ70年の先行性が示されている。植物の栽培や採集、分類は、自然史資料としては確かに最も手近な日常的存在であり、とりわけ高級な設備や装置がなくても研究が進められたことによる事態であろう。

その意味において、施設の先行性、あるいは印刷物の出版期の違いという観点からは、水族館<動物園<植物園の不等式で表わされる発足のタイムラグが顕著である。英国において水族館が最初動物園の一部に併設の形でスタートしている事情は表に示してはいないが、ドイツのベルリンでは、恐竜もこの“水族館”で扱っているのが面白い。

日本の水族館の歴史を上記に照らしてみると、そのキャッチアップ事情が濃く滲み出ていて興味深い。ロンドン動物園の中に「Fish House」として位置づけられた体制そのものが、上野動物園内併設の淡水水族館に採用され、名称も「観魚室」となっている。わが国で海水水族館の発祥が循環装置の開発と时期的に一致しているのは、まさに装置開発すなわち飼育のための水質管理が前提となるという植物界との大きな違いを如実に物語っ

ているのである。

こうして世界の博物館界の大局的な流れを通観してみると、前記の不等式は、自然史博物館での事情、つまり生(なま)物でなく、剥製、骨格、鉱物、岩石、化石や貝殻等のドライ物中心に施設ができることを反映して、設立や発展時代の早期性について、次のように拡張することができる。水族館<動物園<自然史博物館<植物園。そして、この不等式を現在に至るその後のわが国内部でのそれぞれの施設の展開事情と比較して、大変面白い現象に気付く。それは、施設の発展は技術革新に全く依存しているので、館園の“近代化”や“普及・人気度”という観点ではほぼ逆転してしまう点である。巨大水槽、循環・浄化施設、熱交換器等の急速な発達改良が、現在の「水族館ブーム」の原動力となっていることをこのような眼で見るのは意義深い。戦後の経済成長や技術革新とその応用意欲の発現として博物館界の社会的背景がよく覗える事例といえよう。

III. 自然史博物館資料のあり方

1. 収集標本の抱える課題

自然史博物館は、その存立主旨に沿うために可能な限り多種多様の標本類やそれに関連する資料を質量共に高く保有していることが望ましい。しかしながら、自然条件や経済条件、あるいは人社会の倫理条件に照らして自ずと制約を受け、限度があることは当然である。博物館法には、館の存立に必要な資料等を持つように定めているが、「・・・してはならない」型の禁止条項がないから、限度は館自体の判断や制約条件のもとに決まることになる。

神奈川県立生命の星・地球博物館が発足した際のキャッチコピー、「つまり、ミニ地球ってことなんです!」は上記のセンスに裏付けられた短文であって、小型の地球を置いてありますというダイレクトな意味ではない。「地球」を理解し「地域」の特性を示すのに必要と考えられる素材をいろいろ取り揃えてあります、と解されればよい(濱田, 1996)。

言うまでもないことではあるが、博物館の保有する資料にはそれなりの価値がなければならない。もっとも端

的に表現されるのが“館の目玉展示”という評価であろう。しかしながら、それは館のイメージアップアイテムであるから“貴重なもの”、“珍しいもの”“高価なもの”などの価値観に支えられた「館側の」主張誇示である。生命の星・地球博物館としては「開かれた博物館」故に、オープン当初から「目玉標本」の定義を別の観点から捉えようとしてきた。それは入館者自身が展示を一周り観た後、「あれは素晴らしかった!」とか「あの展示が心に残った」という強い印象を持ってもらえたとすれば、それこそが「この館で、その人にとっての」“目玉”と理解すればよい、というコンセプトである。主観から客観への評価主体の転換といっていよからう。

展示標本の本質は一つには何かの状態を示すのに“典型的”であることが必須である。もちろん、そのバリエーションの広がり示すことができれば尚更よい。したがって、試・資料の収集にその視点を常に堅持することが大切である。その意味において質が高く、欠陥ができるだけ少ないもの、という収集・選定時の基準が価格や経費等との兼ね合いで決まることになる。しかしながら、良い展示の裏付けとして研究という立場を念頭に置かなければ、たとえ部分的に不十分であったり、欠損が明確であっても、“補完資料”としての価値を与えることができるものであれば、それは館の収蔵品として十分に意義があるもの、と判断して良からう。分類学的観念に立てば完模式標本の価値はもちろんであるが、多くの比較標本、集団標本があればさらに良い、という事情に比すことができる。

博物館標本の一つの特性として“大型のもの”という性格を認めることは、展示効果からも妥当化されてよい。岩石にしても化石にしても、あるいは樹幹、昆虫標本にしても、「大きいことは良いこと」の通念は、容れ物・置き場所の条件が与えられ、費用の保証さえ得られれば、標本収集時点での一つの資格に加えて差し支えない。野外博物館的発想が伴われていれば、問題点はさらに少なくなる。ライブな展示を主体とする動・植物園、水族館ではそのサイズをもたらずに至った個体年齢と共に高い評価対象となる場合が多い。

成長限界を有しない岩石、地層の標本については、少し異なった視点が必要となる。巨大岩盤の展示には、そのための採集・搬送という手間を必然的に伴う。生命の星・地球博物館には二通りの巨大岩盤標本展示がある。それは組立時の手法の違いによっている。収集時には当然移送可能なサイズでのユニット化が考えられ、展示の際にどう組み上げるかで差異が生じる。スラブやチップまで寄せて原状態に近くして展示したのが、“岩の壁”コーナーであり、巨大柱状節理、枕状溶岩、リップルマーク（漣痕）、褶曲ストロマトライト、ストロマトライト、BIF（縞状鉄鉱層）の6アイテムが、高さ13mの垂直壁に仕立てられている（図3）。安全性を考慮し、上方の約10m部分は強化プラスチック製であり、標本自体は最下部約3mまでが実物であるとしても、展示効果あるいは展示場の雰囲気盛り上げる演出効果としては極めて高い評価を得ている。もう一つの大型岩盤例は、“アンモナイトの壁”である（図4）。現地では傾斜

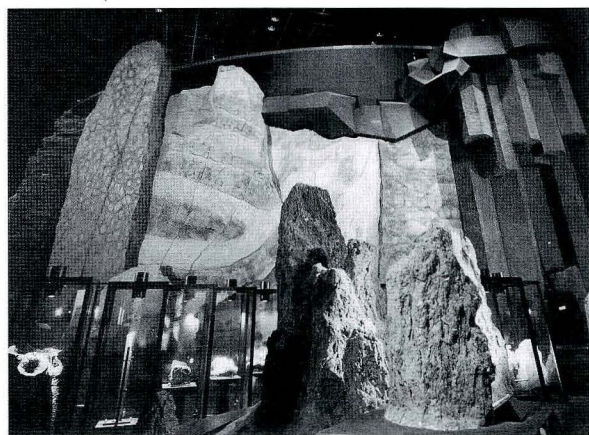


図3. 岩石の大壁。

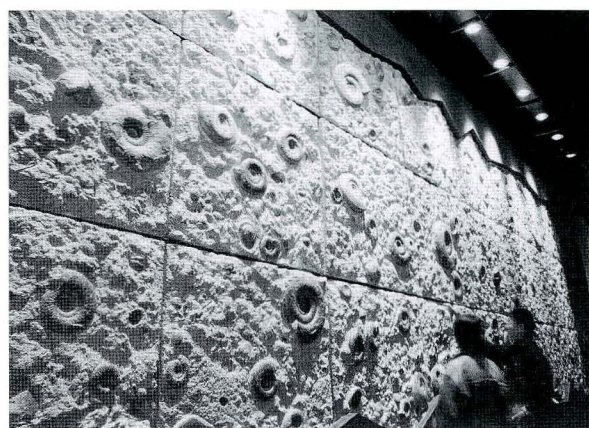


図4. アンモナイトの壁。

した化石層をコードラートの区割りでカッター処理し、組立時にそのユニット境界を取って残したままにして、垂直壁展示として床面積利用の効率を高めてある。これら二件の大型岩盤“実物”標本展示の何よりの価値は、“臨場感”の演出効果とハンズ・オン学習による質感・存在感・認識への貢献であると評価できる。

近年の「型どり技法」の急速な進展により、型どりレプリカや“剥ぎとり”による大型地層展示が費用・労力の面でも大きく改善されてきている。1980年に設置されたつくば市にある通産省工業技術院地質調査所の地質標本館ホール正面を飾る褶曲地層レプリカがその先鞭をつけたものと言えよう。最近ではこの手法も随分ポピュラーになってきて、サイズもさらに大型化できるように改良されてきた。とりわけ、恐竜の足跡（歩行跡）化石岩盤のように、広さそのものに第一義的な重要性をもつものにその有効性が発揮されている（岐阜県博物館、福井県立博物館、富山県大山町教育委員会施設等）。

“剥ぎとり”標本は、しばしば軟弱地層断面標本として、考古学や地質学用の大型展示に活用され、さらに崩れ易く保存に難の多い地層露頭の永久保存、室内展示として一層深い意味を持つ時代となった。ユニット化して作成されるが、接合技術の向上により、実物の地層とその広がり来館者に現場理解やハンズ・オン体験をしてもらうのに多大な貢献をしている。伊豆大島火山博物館で、二階展示場の壁全面にセットされた3.0m×20.5mの火山灰層断面剥ぎとり標本（1990年設置）はこの手

法の早期の作品として評判が良い。この地層の露頭は、「地層大切断面」として島の観光マップにも記入されている「島の目玉」露頭であるが、海岸という条件のために風化・劣化・植生被覆が早く進むため、今後何度も表面整形による「若返り」の手続きが必須であることは言うまでもない。その度に地層の断面部位が少しずつずれるから、初期の“剥ぎとり”標本は、重要な非再生型「遺物」として保管されるべきものとなった。

生命の星・地球博物館での生命展示室における昆虫展示手法は極めてユニークである。全体として小型標本が卓越する昆虫世界は、その代わりに美麗標本を擁しているメリットがあり、その上手な活用が展示に大きな影響力を持つことになる。通常はどうしても分類群をまとめて示すことに努力することになるのであるが、並べ方一つにしてもアートセンスを発揮し、標本を美の素材としても認識する姿勢があれば、展示コーナーの雰囲気は見違えるように活性化される。「ドイツ箱をキャンバスに、虫を絵具に」のセンスは、ある面では邪道との批判を受けようが、一般来館者にとっては、ムシの嫌いな人にさえ、ある種のインパクトを与えるものである、と評価できる。

2. 地球自然保全とのかかわり

自然史博物館の主題に用いられている自然誌素材は、再生可資源であろうと非再生型資源であろうと、かけがえないもので占められている。そのため、その収集時における地球自然やその環境への配慮が不可欠であることは言うまでもない。これは、前述のような巨大標本や集団標本についてだけ語られるべきものでなく、当然、一個一個の標本に対しても考慮されるべきであろう。

博物館活動の一環として蒐集行為をする場合は、自らの意識によって、十分抑制機能が発揮されるに違いあるまい。業者等への委託事業もほぼその枠内で収まるべきであろう。研究に資するための標本採集活動は、博物館独自の行為ではない。大学や研究所等による広い局面でも行われるものであるから、当事者の認識とか倫理観の問題に帰すことになるのが通例といってよい。

法律的な規制による標本・資料収集は、国内・国際両面ですでにその枠内で進められてきている場合が多い。生き物に関しては、季節性や地域性を考慮した様々の採集局面が考えられ、実行される。しかし、一般的に考えて、道理をわきまえないアマチュアやもぐり業者を除けば、問題は限定されてくる。むしろ、研究実行上、たとえば定点観測点をもっている、連続観察とか定期採集の手法には限度があり、生態学的には実態からかけ離れたデータしか入手できない場合の方が多い。これまでもトータルな生態系とか、周年変化の定量把握とか、長期にわたる継年観測記録等については、不十分性が極めて高かったことを認めざるを得ない。

映像情報の取得や処理・交流に飛躍的な進歩がみられる現代の高度情報化社会に対応した研究・展示手法として、とりわけ自然環境にできるだけ人為のインパクトを与えずに、資料を入手する方策が模索されるのは当然である。博物館活動ではないが、わが国の海洋科学技術セ

ンター(JAMSTEC)が、相模湾の初島沖の深度約1200mの海底に1993年に設置した長期観測ステーションのモニターからの映像などがホームページに公開されている例はリモート環境へのアクセスとしても大変意義がある。近い将来に、関連する博物館や水族館のモニターに接続し、より多くの方々に見てもらえる状態になることが強く望まれるところである。

規模や対象に違いはあるが、いくつかの火山博物館に設置されている“火口カメラ”からのモニター映像は、来館者には「一過性」データの印象を与えるであろう。しかし、実際にはデータ保存さえできれば、次の火山噴火活動にまでわたる立派な継続観察であり、見かけ以上の有効性があることを高く評価する必要がある。

「標本中心」の博物館コンセプトはこれからも変わることはないと思われるが、映像資料の価値を情報学として正しく捉えるならば、「標本=実物+映像」の考え方が、今後、ますます大きくなり、写真は写真、実物は実物というセパレート型認識は次第に後退せざるを得ないであろう。「かたち」の研究で、長らく固定観念化してきた形態学は一面的であったことを、館野(1992)がタコやイカなど“定形”を定義し難い軟体動物の形と機能について動形態学(dynamic morphology)なるコンセプトを提唱し、「実物+動画像」の在り方を学術的に意義付けした功績は大きい。生体や原形に損傷を与えない諸手法を活用し、無侵襲・非破壊的に内部構造やその運動機能まで提示するのであるから、今後、博物館界において生き物や事象の解説・展示に大いに活用されることが期待されよう。ただ単なる外観上の生態映像とは格段の違いがあることがより深く意識されるべきである。

映像をより積極的に“標本化”していこうとする新しい試みが、神奈川県立生命の星・地球博物館の研究活動で進められている。瀬能は、伊豆一帯をメインフィールドとして、その魚類相の経年変化を捉える手法として一般ダイバーの撮った魚影の提供を広く求め、それを登録番号付きの“標本”として活用し、従来では考えられなかった多彩な魚類相解明に成功している(古瀬・瀬能他, 1996; 瀬能・御宿他, 1997; 瀬能・牧内他, 1998)。専門家の目によれば、たとえ多少ピントがずれていたりブレがある画像であっても、極めて参照価値は高いという。生態学的非破壊研究手法として今後の発展が期待される。世界の海でダイバー、海中施設、観光船等の急増による自然環境破壊が進む中、この発想の転換は高く評価されるべきものであり、自然史博物館の活動として今後事例が増えることが大いに期待される。

植物を代表とする、いかなる再生可資源といえども、貴重種は貴重種であり、常に新鮮な展示を計画することなどできない。したがって、高価にはつくが、プラスチックによる復元レプリカ生態標本の価値は高い。季節性を超えて展示できるメリットもあり、自然を荒らさないためにも、今後さらに多彩な精細高級レプリカ製作のノウハウが蓄積されていくことが切に望まれる。

自然環境を壊さない標本採集活動に努力する傍ら、他方では採集された資料をいかに有効に使用するかについて吟味することも極めて大事である。クリーニング時に

生じる破片であっても、場合によっては、来館者へのサービスとして無料配付素材化する工夫がなされて然るべきであろう。

博物館標本は、元来もれなく記帳・登録されるべきものであることは言うまでもない。しかし消耗品の素材として処理されてよいアイテムもかなり存在する筈である。外国例であるが、オスローの博物館では入口ホールの中央に山のように石屑が積み上げてあって、「ご自由にお持ちください」と掲示が出ている。よく見ると、オルドビス紀の各種筆石類が含まれる岩片なのである。聞いてみると、館を建設した時、基礎岩盤の整形作業で出た岩屑なのだという。日本では見られる場すら稀有の事態であるから、研究用・お土産用にポケットをふくらませた記憶が鮮烈である。当然、これらは登録されていない素材であるが、その有効利用の意義と果たす役割には計り知れないものがある。

このように大量の頒布標本でなくても、相当量の余剰標本が生じる見込みさえ立つならば、準登録扱いとして、自由な用途を開発することも考えられてよい。アウトリーチ活動の一環で子どもたちにローンキットを提供する場合、生命の星・地球博物館ですでに先行事例があり、人気を集めている（化石ローンキットグループ, 1998; 田口・大島他, 1999）。このときの素材は、新生代中津層化石発掘事業（神奈川県立博物館, 1991）時に得られた含化石礫岩中の貝類化石が中心であるが、今後、各地で類似の事例が増加することが期待されよう。恐竜化石発掘に伴って出る植物や貝を含むスラブなど、いかに破片であっても子どもたちに“化石クリーニング”体験を楽しんでもらえるだけでなく、地球過去の“宝物”として夢をふくらませてもらえる絶好の記念「土産物」候補たるものの一つである。ただし、このプロジェクトには特色として価値の高い標本が含まれていた場合、その資料には作業をした個人の名前を記録したうえ、館の登録番号が付される、という手続きが待っている。

生命の星・地球博物館では“コレクション・オブ・コレクション”と愛称している標本収集と保管・登録の実績を重ねている。最近では故 酒井 恒・横浜国立大学教授のカニ類標本（神奈川県立生命の星・地球博物館, 1998, 1999）、故 鹿間時夫・横浜国立大学教授の貝類標本、故 櫻井欽一博士の鉱物・岩石・化石標本（神奈川県立生命の星・地球博物館, 1997）、故 尾崎公彦横浜国立大学助手の植物化石標本（Ozaki, 1991）等、貴重な自然史資料コレクションをご家族等関係者の方々の深いご理解のもとに一括して“コレクション”登録し、目録制作、特別展開催、ジャンボブック展示などに広く活用させていただいている。

熱心なコレクターがその収集に注いだエネルギーは莫大であると同時に、貴重なアーカイブとしてかけがえのない自然史素材を構成しているのでその一括収蔵の意義は大きい。国外における著名なコレクターのコレクションも、購入等により館蔵品化している（例. サメの歯化石のケースコレクション: 図5; 神奈川県立博物館, 1992, 1994）。“コレクション”は別の観点からすると、極めて

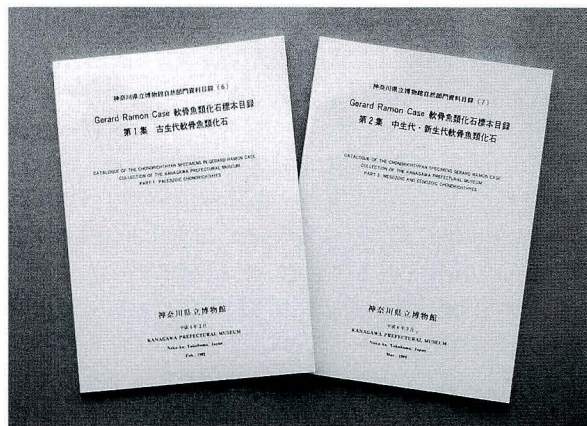


図5. ケースコレクション化石標本目録。

個性の高い「作品」でもある。そのため、ニュートラルで総華的に流れ易い博物館一般収藏品と違った風格や意味を持つユニークな存在である。“コレクション”は数や量、分類群に占める意義、標本の質などの要素以外に、自然保全にも間接的ながら大きく貢献する「コレクション学」としても改めて評価する姿勢が大切であろう。

IV. 開かれた博物館への道

1. 生涯学習と博物館活用

生涯学習と博物館との関係についてここ数年の間に大きな変化が起ころうとしている。これまでは、初期の“物見遊山”的来館者に対して、社会動向の反映とは見えず、個人レベルでの意識に基づく行動として、統計的資料の中に埋没させられてしまうことが殆どであった。ところが、本格的な“長寿福祉”社会が現実化した今日、博物館は“余生”を有効に過ごし、さらなる知的好奇心を満足してもらう“場”の一つと位置づけられ、カルチャーセンター的存在と考えられ始めた。けれども、間もなく年老いた人々のためのものだけというより、より幅広い年齢、身分、職業の人々が、一般常識として自らをブラッシュアップする意味での生涯学習のための手頃なメディアとして機能すべきだとする見方が強まってきた。

加えて、2002年に完全実施が予定されている学校週5日制が話題になり始めた頃から、あるいは偶然であろうか、学級崩壊、校内暴力、家庭内暴力等々“非行”青少年の激増が心配され始め、博物館を教室外教育の場として活用したら、とする期待が高まってきたいきさつが見られる。しかし、制度教育の不備や力不足を博物館で補うという発想には本質的に無理があるため、次は休みとなった2日間の“ゆとり”の学習に博物館を活用したらという考えに移ってきたのである。「子どもたちと遊んでいますか?」という問いは、親にも教師にも耳の痛い問いかけであろうが、その問題のブレイクスルーとして本当に生涯のスパンで、生涯学習の一環にその2日間を当てるという発想が大きく台頭してきたのである。

文部省では生涯学習局が筆頭局になってからは、専ら後段に記したような方向性が強く打ち出され、さまざまな博物館支援施策が次々と講じられるようになってき

た。例えば、1997年度にスタートした科学系博物館活用ネットワーク推進事業がある。これは、一種のモデルづくりの委嘱事業である。この事業の委嘱先は、「博物館地域ネットワーク推進協議会」であるため、生命の星・地球博物館が協議会設立の呼びかけ人となり、江ノ島水族館をはじめ、神奈川県、東京都、静岡県内の博物館と市町の教育委員会、青少年指導員協議会、母親クラブ連絡会及び学識者の協力を得て、1997年度に「南関東地域科学系博物館ネットワーク推進協議会」を立ちあげた。事業の実行グループとしては、参加の7つの博物館を「大地系」と「水系」に分け、生命の星・地球博物館と江ノ島水族館がそれぞれのコア館となり、7館が各館の特性を反映させた24の事業に3カ年計画で取り組んでいる。その組織と運営の概略を図6に示しておこう。

具体的な事業活動としては、非常に多様性が高く、親と子、先生と子どもたち、親と先生方といった自由なつながりの場を創出し、野外体験、観察会等のハンズ・オン型事業を実施している。学校のカリキュラムとは切離れた、学校教育と直接のつながりのない自由なエデュテインメント学習を繰り広げている。この活動の詳細は他に譲るとして、これまでのわが国の文部省にはなかった自由度の高い生涯学習方式を模索しているその姿勢は高く評価されてよいであろう（濱田、2000b）。

生命の星・地球博物館ではこのような事業に先行して、1995年の発足時から学芸員のアウトリーチ活動として週5日制対応プログラムを置き、その他の学習支援活動も多彩な局面で実行している。それらを列挙してみよう（表2）。関連して文部省科学研究費や財団からの助成研究等にもプロジェクトがあり、全体として館の目

的とする開かれた博物館への道を着実に歩んでいる。

博物館での生涯学習は必ずしも一般来館者がメリットを受けるだけではない。例えば、友の会に参加しているメンバーが参加すること自体が、立派な生涯学習効果になっているケースであろう。なかんづく、ボランティアとして登録している人々にとっては、ボランティアの立場での学習を可能な範囲で努めあげ、自己の教養を高めようとしているのであり、そのような理解こそが博物館ボランティアの現代的意義を発揮するものであると言えよう。

生涯学習時代とは言うものの、かなりの関係者に生涯教育という考えから脱却できない人々がいる。つまり「教育」は制度でなくともあり得るという「家庭教育」的発想である。本来親子のコミュニケーションが子どもの心身の成長に大きな役割を果たしていることは言うまでもないが、「制度教育」（フォーマル・エデュケーション）が確立されてからは「他人」に「知の拡大」を任せ、しかも「カリキュラム」というプログラム化された順序立ての中で育てられるようになり、「家庭教育」というより「家庭訓育」とか「しつけ」といった表現による、よりスキンシップ型ケアの役割が忘れられがちになって混乱が始まったと言えよう。ちなみに、「教育」の主旨により「専門教育」、「職業教育」という考え方や制度は堂々と成立する。

真の生涯学習は、年齢、職業、地位等についてバリアフリーであり、当人の自由度が非常に高いものであり、周辺（図書館、カルチャーセンター、博物館等）はその支援で、多彩なメニューを用意し、可能な指示を与えるという、ゆるいシステムが本質であろう。とりわけ博物

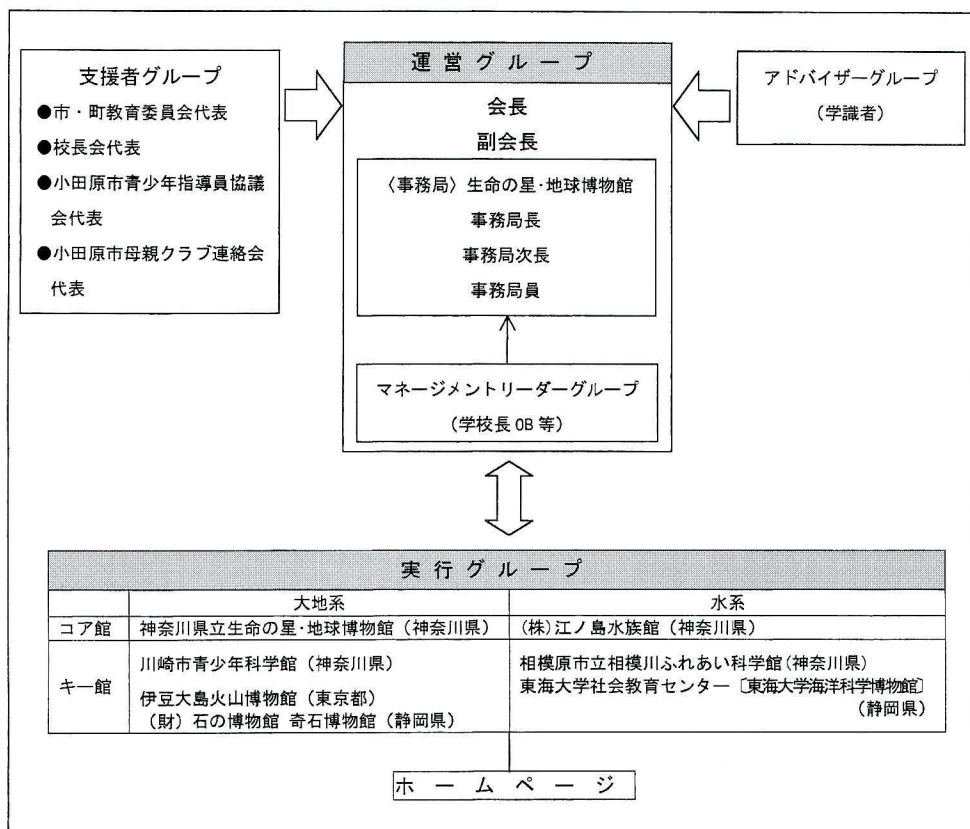


表 2. 学習支援事業（1998 年度，神奈川県立生命の星・地球博物館年報より）

自然科学講演会			学校 5 日制対応講座		
事業名	開催日／場所	参加者	事業名	開催日／場所	参加者
特別展連続講座	9月6・13・20日	200名	雫木林ウォッチング	4月11日 秦野市弘法山	11 名
特別展講演会	2月21日 3月21日	124名	水辺の動物ウォッチング	5月9日 松田町川音川	41 名
研究テクニック講座			磯の動物ウォッチング	5月23日 真鶴町三つ石海岸	57 名
事業名	開催日／場所	参加者	水辺の昆虫ウォッチング	9月12日 愛川町八菅山	46 名
地形ウォーキング	5月 3日 小田原市国府津	雨天中止	きのこウォッチング	10月17日 大磯町湘南平	37 名
図鑑を作ろうー魚編ー	5月10・18日 実習実験室	8名	鳥ウォッチング	11月14日 小田原城址公園	25 名
スゲ属植物分類	6月 3日 実習実験室	34名	博物館スクール		
化石研究テクニック	7月29・30・31日 実習実験室	10名	事業名	開催日／場所	参加者
箱根の植物群落	9月11日 箱根町駒ヶ岳	50名	ちょっと大きくしてみよう	7月25日 実習実験室	18名
くだものと野菜観察	9月26日 実習実験室	13名	夜の昆虫探検隊	7月26・27日 山北町中川温泉	48名
地形ウォーキング	10月10日 松田町松田山	34名	オオカミってどんな動物	8月8日 博物館内	60名
化石採取と観察	10月17日 大磯町西小磯	雨天中止	化石教室	8月20日 実習実験室	38名
図鑑を作ろうー魚編ー	11月8・15日 実習実験室	10名	博物館探検隊	8月26日 博物館内	43名
大地の生い立ちを探索 大地の時の流れ	12月12・13・26・27日 大磯町西小磯・山北町谷峨・実習実験室	30名	動物の行動観察	3月25・26日 実習実験室 小田原城址公園	5名
図鑑を作ろうー魚編ー	1月18・25日 実習実験室	5名	博物館探検隊	3月28日 博物館内	27名
冬芽の観察	2月14日 長興山・風祭	22名	神奈川オープンカレッジ		
鉱物研究講座	2月20・21日 実習実験室・千葉県 鋸南町勝山	34名	事業名	開催日／場所	参加者
身近な自然発見講座			植物分類学講座	11月3・21・29日 12月20日 実習実験室	46名
事業名	開催日／場所	参加者	教員のための博物館講座		
第1回	4月15日	雨天中止	事業名	開催日／場所	参加者
第2回	5月20日 博物館～妙力寺～長寿園	32名	15年次教員研修	8月 4日 博物館内	37名
第3回	6月17日 博物館内	32名	企画普及講座		
第4回	7月15日 博物館～一夜城公園	18名	事業名	開催日／場所	参加者
第5回	10月21日 博物館～辻村植物園	26名	植物画講座	4月29日 箱根町仙石原高原	31名
第6回	11月18日 博物館～一夜城公園	14名	植物画講座	5月9日 駒ヶ岳を予定したが雨天のため実習実験室	22名
第7回	12月16日 博物館～吾性沢～長寿園	29名	※ 神奈川県立生命の星・地球博物館年報第 4 号（1998 年度）より引用		
第8回	1月20日 博物館～長興山	27名			
第9回	2月17日 博物館～小田原城址公園～小田原駅	18名			
第10回	3月17日 博物館～長興山～風祭	41名			

館はそうした機能に最も適した公共性の高いメディア型機関であり、これからの時代の中軸を占める立場にあることを深く意識しなければなるまい。

2. B-N-U 進化シリーズの意義

(バリアフリー (B) からノーマライゼーション (N) そしてユニバーサル (U) へ)

社会に言うバリアフリー対策は、最初建築界にあって各種身体障害を持つ人々にできるだけ不自由を感じさせないためのハード施策として登場したとされる。ポピュラーな例としては、要所要所への手すり配置、階段の代わりのゆるいスロープ道設置、路面への誘導ブロック敷設等であろう。

とはいえ、バリアフリー (barrier-free) という言葉自体もわが国では未だにポピュラーになったわけではないし、多くの公共施設にあってその普及が大幅に遅れている事態は残念である。近年、交通機関の施設を中心に身体的弱者用としてエスカレーターが多様されるようになったのは喜ばしいが、元気な人々の運動意欲を衰えさせることにむしろ大きな影響力があり、トータルにみれば決して手放して喜んでばかりはいられない。

また、折角設置された路面の誘導ブロックの意味や役割を理解しない向きが多く、その上に自転車やバイクを止めたり、デザイン上の邪魔物扱いを公言するデザイナーもいるなど、社会的認知度をより一層高める必要が大きい。博物館施設についてのバリアフリー対応ハードもまた現時点では奥野 (1998b, 1999b, c) の調査が示すように、かなり低調であることは残念である。

“モノ”をビジュアルに見せることを目的として誕生し発展してきた博物館界には、視覚障害を持つ人々への便宜を考える余裕が、その長い歴史の中にはなかったかの印象すらある。近年は、とくに CRT 利用の動画像系の採択も多くなり、ますます格差が広がってきているとみることさえできる。

生命の星・地球博物館は、“開かれた”博物館を目ざすポリシーから、レシーパタイプの「音声ガイド」や赤外線利用のトーキングサインシステムの導入を段階的に進めている (図7)。また視覚障害者、視覚障害者教育担当者、誘導・案内ボランティア、学芸員、館職員が一体となった研修会や検討会を頻繁に開催し、改善・普及に

力を注いでいる (奥野, 1998a, 1999a)。

バリアには多くの局面が存在し、身体的障害にとどまらないものであることは言うまでもない。言語や文字、考え方等の文化的バリアの存在も決して無視はできない。このような諸般のバリア解消手段として正規化、一般化 (ノーマライゼーション, normalization) があり、多くの対応が必要となる。しかしながら、一方では個性や特色を無にしては博物館の所期の目的を壊すことにもなりかねず、安直な平均化・均一化、あるいは規格化は謹まねばならないことも大切である。

このような様々な要素を勘案しながら、できるだけ多くの人々が博物館を利用し愉しんでもらえるユニバーサル (universal) 化への道が模索されることになる。したがって、万人をターゲットにした理想的な開かれた博物館への途は B-N-U 進化シリーズとして、意識され努力されることが肝要であろう。安易なグローバリズム発想で地域特性を失うようであってはなるまい (奥野・濱田, 印刷中)。

ユニバーサル志向の一つとして、五官を使った体感・体験学習を推進するのは、博物館のもつ特性発揮に期待されるところが大きい。“実物を”という主張に原点を置く従来の考え方と電子媒体を駆使した“バーチャル”世界を導入してのニューツール政策 (小出, 1999a, b; 小出ほか, 1998, 1999a, b) とは共存的・補完的であっても基本的に対立すべきものではない。

わが国の教育界では、初等・中等教育から大学院教育まで、近年とみに実物に当たる実験・実習の機会が減っており、体験無しのバーチャル世界や頭の中での理解に頼ることが圧倒的に多くなってきた。加えて、低年齢時から“労働”という体験・学習の場が失われたままで、成人・社会人となってしまうパターンが定着してしまった。したがって、経験から応用へと実行場面での工夫力に欠け、改良・発明等の独創性も低くなり、マニュアル依存症候群が顕著に現れている事態が目立つ。それ故に、ヒューマン・エラーに結びつくことも多くなろう。

3. ハンズ・オン思潮

英語に、「触れるな！」の意で “hands-off” という表現があるが、これの対意語とするような新しい用語として、いま欧米の博物館・園では “hands-on” (ハンズ・オン) という考え方が普遍的になりつつある。原意からすれば、「触って」とか「手を触れて」という単純な事柄に違いないが、hands-off の持つ命令的、かつ否定的ニュアンスと全く対置されるべき、という発想からであろうが、もっと幅を広げて、「手を出してみよう!」「やってみよう!」から「実物に当たってみよう!」「原体験をしてみよう!」といった抽象的な呼びかけ語として通用するようになっていく。

わが国ではもともと博物館展示や園施設において「立ち入り禁止」、「柵を越えるな」「撮影禁止」、「触れるべからず」等々、やたらと制限あるいは禁止令的な注意書きが多い特徴がある。“国宝級”とか、“稀少物”、“貴重品”等の「開陳」には、どうしても「・・・すべからず」の規制が不可欠だったからであろうと推察される。



図7. ユニバーサルのデバイス例。

このようなわが国の博物館・園の一般事情が長らく続いていたので、戦後、「恐竜展」などで、限定品ながら「触れてみてください!」という実物骨格化石に関して、「タッチ・カード」発行などのPR手法がとられた時は、そこに長い列ができるなど大人気を博したのである。水族館での様々なスタイルの“タッチ・プール”も同様に大きな集客効果を持った経緯があり注目される。ハンズ・オンの考えが“輸入”されるより前のことである。

生命の星・地球博物館では地域の子どもの学習環境を支援することを目的として、博物館探検隊やアウトリーチ活動としての野外観察、野外体験実習プログラムを数多く実施している。これらの活動のコンセプトは、一つには“開かれた博物館”であり、一つには“五感で体感を”というところにあり、基本的にはハンズ・オン発想の具体的局面である(濱田, 1994, 1997)。

「手で触れて・・・」から始まり、「体験してみよう」にまで拡張されたこのハンズ・オン発想は、決して子どもたちの世界だけに適用されるものとして出されたものではない。あらゆる年齢、職業、地位に共通する体験学習のすすめ、つまり、ユニバーサル思潮をまさに実行する事業であり、生涯学習の時代要請にぴったりの一つの望ましい学習支援活動といってよい(濱田, 1999c; 奥野・濱田, 印刷中)。

このようなハンズ・オン思潮は、時代の流れとして社会現象とみる場合、その及ぶところは、別に博物館活動に限られる必要は全くない。いうところのアウト・ドア・ライフを志向する世間一般の人々の日常でのレジャー動向にあって、少しでもエデュテインメント要素がからめば大変好ましいハンズ・オンの自主活動にはじまり、ユニバーサル思考に至る指導者なしの自発的学習方式として、今後ますます広がっていくことが期待される。とりわけ、一般市民の自然史楽修における重要かつ有効な地球自然理解への導入、突破口につながることは確かである。

ハンズ・オンの発想は、欧米の博物館界ですでに半世紀近く前に出ていたし、わが国でも生身の手を使うことが大切な知的要素につながっていると評価されてはきた。しかし、余りにも効率を追い求め、無駄を排する機運が急激に増大し、あまつさえ“至便の”電子機器類が登場するに至って、旧来のハンズ・オン体験は影をひそめるようになってきた。

ごく最近になって、このハンズ・オン発想が博物館界で復権の兆しを見せている。それは前述のようにニューツールとのバランスの問題を背景に、例えば、自然史理解に体験が不可欠であるという再認識の時代に到達したからと考えてよい。とりわけ、知的吸収力の強い幼児期・少年期の学習にとって、ハンズ・オン手法は発達心理学的にも極めて妥当性が高いからである。

アメリカの博物館界で、この30年間にチルドレン・ミュージアム系が飛躍的發展をとげた原動力は、このハンズ・オン展示手法の普及にあったことを見逃してはなるまい。ハンズ・オン展示業界が大きいのか、経済界にも一石を投じたとされる。わが国では、ハンズ・オン発想での最終活動や解剖学習あるいは野外活動がいろいろ

の要件に妨げられ衰退の一途を辿ってきたことを、この際深く反省しなければなるまい。ハンズ・オン発想の展開こそが、青少年の“理科嫌い”や“科学離れ”の打開に道を拓くものであろうから、フォーマル・エデュケーションでの不備・不足を、体験型博物館活動とその延長の中で、ハンズ・オン学習を主役に立たせることが、高度情報化時代なるが故にいかにか意義深いかを改めて確認すべき情勢になったと考えたい(濱田, 1999a, b, c, d)。

V. 博物館運営の諸問題

1. 学芸員・館長の抱える課題

この問題は、極めて“日本的”状況下においての議論になる。日本の博物館で、とくに学芸員問題が深刻に受け止められているのは、公立、とりわけ県立博物館レベルが代表的もしくは典型的な例であると思われるので、これを念頭に置くことにする。

いわゆる“県博”はまぎれもなく県という地方自治体の一つの組織、機関であるから、人事も予算も方針の大綱も条例等によって拘束されているのが当たり前である。それだけに一度流れができると、それは固定的になるケースが多く、問題発生の種類となってきた。

いまいし具体的に論じてみよう。学芸員は県の採用試験を受け、ある程度その専門性を評価され採用される。採用基準は時代により県によって多少の差があり、30年程昔(1960年代)には、高校卒の人を学芸員補として採用した例もみられるが、現在はほとんどが大学卒を条件としている。職についてから学芸員資格を得ることも可能であるが、また同時に、博士号取得をできるだけ早く、というプレッシャーもかかる。

問題は2つに大きく分かれる。一つは“研究者と学芸員とは両立するか”という、かなり言い古されたテーマである。博物館は一般に研究用のハードを備えていないから、デスクワークだけの仕事内容の専門は別として、実験時間や学会員との専門討議の機会は、学芸員としての勤務時間外に自らの判断で産み出さなければならない。基本的には、現行の博物館法に定められている学芸員の職務内容に「研究」という項目はなく、「その他」に入るものと解して運用されているところに根深い問題がある。

もちろん、理念的には、良い展示・解説は、良い研究に支えられる、という図式が成立するから、研究をしなくてよいという論旨はあり得ない。しかしながら、大学で専攻してきたジャンルを学芸員になってからもストレートに追おうとすると、場合によってはたちまち行き詰まってしまうこともあり得よう。厳密に言って、学芸員は個人的な専門分野と博物館の仕事としての専門分野の二つの顔が持てる人物でなければ勤めぬけない、という表現は間違いなからう。両者がたまたま一致している人は幸せである。

ところが、博物館の仕事として、という部分にもう一つのボトルネックがある。館の事情や人事との関係もあって、この部分は一定せず、大まかなしかも、かなり幅のある“専門性”とならざるを得ないのである。「学芸員とは雑芸員なり」という皮肉な表現は、この辺りに

由来る。館によっては学芸員が専ら展示場解説に当たるし、所によっては全く展示場での現場対応をさせず、企画・展示業務のみを受け持つこともある。

第二に、昇任の件である。これは、後述の館長問題とも関連がある。大勢の学芸員の中からたった一人の学芸部長が生まれ、その人物の在職年数次第で、次のジェネレーションの人（人々）は、決定的に頭打ちとなる。仮に、学芸部長から副館長や館長への途が一般的に開かれているシステムがあれば、問題はぐっと軽減されるが、昇任にあたっての評価の困難さもある。専門分野が全く異なり、館活動の分担も違う学芸員の“業績”や“貢献度”を適正に評価するのは至難の業である。全く違った観点からの相対評価が優先するケースも出てこよう。となると、何のための専門業績？という疑念も当然湧いてくる。

一方で、館長問題はまた条件の違う人事として考えられねばならない。一般論ではあるが、博物館は教育委員会の所管となっているので、そのカテゴリーの適当な人物がいれば専門性どころか、博物館と全く無縁の者であっても年齢等のタイミングなどで、館長として任命されるケースもあろう。“天下って”くるという表現はラディカル過ぎるかもしれないが、残念ながらセンスとしてはそのようなわきも聞こえてくる。

館長職にも、当然学芸員並みの専門性が期待されてよい筈であるが、現状では専門職より管理職の重みをカウントすることが多いであろうから、事務系の人物でも、手腕さえあれば外部からであっても構わない、とする人事姿勢ができてくる。しかし、“仕事理解”の局面では学芸員と事務系館長との間には溝がで易いので、学芸員側の意識としては学芸員の中からの昇進か、せめて外部からでも学芸員への理解が期待される“学術の人”なら、ということになるのであろう。仮に、タイミングよく専門家で適当な人が探せれば、非常勤として来てもらう、というケースもある。

1980年代から、わが国でのいわゆる“博物館建設ラッシュ”が起こると、たちまちこの館長問題が各所で浮上してきた。その結果、“研究者館長”あるいは“学術系館長”とでも言える人物の“非常勤”での就任が相継いだ。となると、普通、学芸部長より高年齢の人ということで、館長の平均年齢は相当なものとなり、このまま事態が推移するならば、今後ますます“高齢化館長システム”がはびこることになる。

ここで、一寸視点を変え、事務系職員に焦点を当ててみよう。この世界は諸般の事情から人事異動が多く、2～3年を原則としての異動が定着している。人事交流の場がほとんどない現在の学芸員の“固定制”と強いコントラストがあり、なかなか打ちとけるところまで付き合い合えない間に、転勤というパターンが続き、館の運営上、いささかの負の要素になると考えられる。新設の館や再編整備で再出発の館では、全体に活気があり、共通の仕事に迫られることも多いので、事務と学芸のバリアは比較的低い。しかし、いずれ制度や体制が落ち着き、ルーティンな経営期に入ると人事サイクルの短い事務系とほとんど動かない学芸員との間は、不仲とまでいかなくてもビジネスだけの付き合い的な冷めた関係に終始し易

いという欠陥がみえてくるおそれ大きい。

こうした不整合事態を何とか早期に解決できないものであろうか？といった要求は、学芸員からの注文としても声が高くなる。直接的な解決策はどこにも見当たらないが、「責任を持ってない発言」を前提として、次のような方策が考えられよう。

- ・学芸員の圏域をこえ、諸般の文化バリアを超えて異動・交流するシステムを考える。一時出向型でも構わない。
- ・学芸員の身分にかかわる職階制をもっと細かく刻んで、昇進意欲のもてる制度を検討し、少しでも学芸員の“固定・沈着”化ムードを緩和する。
- ・学芸員から副館長・館長へのルートを開拓し、せめて、「学術系館長＋事務系副館長」と「事務系館長＋学術系副館長」のような交互制を模索する。
- ・事務系館長の頻度を可能な限り少なくし、“外来”でも“非常勤”でも、できるだけ学術系館長を掲載し、固定化しやすい学芸員とのマッチングを図る。
- ・元・前等、旧学術系館長を“顧問”格として位置づけ、実質的に学芸系と事務系との調整役を果たさせる。

いずれにせよ行革の余波として、“県博”レベルの民活化・民営方式化が動き始めたことを考えると、博物館マネジメントの最大の課題となる学芸員、館長の立場問題は、今の段階からもっと活発に各地で論じられてよいのではなかろうか。それには県立博物館とは全く異なった運営コンセプトとシステムですでに稼動してきている多くの博物館・園類の事例を参考にした幅広い論議が、もっと積極的に求められるべきであろう。とりわけ開かれた博物館として、社会に貢献するという基本的な立場をどのようなシステムで受け止めてゆくのがよいのか、少しでも早く考えを巡らせておくのがよい。

望ましい館長の状態の一つとして、自分の博物館論を外に向けて発信できる、ということを考えてみよう。館長としての在職年数が長くても、また博物館とのかかわりの深い事務系館長であってもこれはなかなか実現し難いことであろう。逆に言えば、それが可能な館長の立場をいかにして確保できるかということが、今の日本の博物館界の最大の難題と言えるかもしれない。館長を置きながら、実質的に“館長不在”に近い状態で運営されている例が多々見られること自体、先進諸国からみれば大変不自然な社会構造、文化構造であると言わざるを得ないのである。

2. 提供メニューの多彩化

現代型博物館の果たすべき役割は、生涯学習時代へ向けての深い社会的認識と、学校週5日制の完全実施、そして、その子どもたちへの良い学習環境の提供という三つの大きな流れを受けて、権威誇示、上意下達型の“見て行け”博物館の、高級ではあるが単調なメニュー提示で済んでいた時代とはすっかり変わってきた。極端には、展示にくどくどしい説明はなくても子どもたちの感性だけでアプローチでき、理屈なしに体感的に“知”の獲得へのイントロダクション、手助けになるような、いわゆる「edutainment」方式に徹する博物館が成立し得

る世の中になってきている。

かつては、公園とか遊園地、あるいはエキスポのパビリオンやゲームセンターでのアイテムと決めつけられていた遊具タイプ設備に代表される体験型“遊び”の思想が、昨今では、はっきりと博物館展示から体験コーナーの目的に取り入れられ、館の重要、かつポピュラーな考え方にまで伸びてきた。児童館や児童科学館型の、ターゲットを明確に低年齢層に合わせた立派な大型施設が各所に誕生しつつあるのは何よりの証拠である（例：福井県立児童科学館、佐賀県立宇宙科学館）。

クラシックな“分類学的”陳列、しかも原理優先として地味なアイテムもとり込み、その体系の完全さを売り物にし、レベルの高さの裏付けとしてきた博物館展示は知識の押しつけになり易い。大学での教育目的の資料館では、それは今でも必要な方式であると捉えられるべきではあろうが、科学や自然への楽しい誘導を目的にする一般博物館では、同じ鉱物の展示コーナーでも珍奇性や美しさを軸にした目立つ展示とするか（例：財石の博物館 奇石博物館）、マグマのもたらす地球の恵みとしてストーリー性の中に位置づけ、大型標本や結晶標本を陳列する（例：神奈川県立生命の星・地球博物館）ようなケースも増えてきている。

展示コンセプトのうち、目立たないが着実に変革が起こっている点は、立派な個別標本の見事さを強調する立場から、生態的な意味がそれとなく感じとれる全体標本、あるいは集団標本を重視する手法が卓越してきたことである。魚のレプリカー一匹を置くよりも、魚化石一体づつを並べるよりも、“群れている”という動物の特性が誰にでも直感的に受け止められるような多数個体展示の方がより有効、とする認識が強くなってきているのである（例：奥出雲多根自然博物館）。

博物館展示や解説、ビデオを主体とした映像展示のあらゆる局面に、このような認識の広がりが浸透してきているので、従来ならば“無駄”と批判されるような、無声のバックグラウンド動画像も、雰囲気演出の大切なアイテムと認めるようになってきている。展示心理学からこれらは十分に有効性が証されている。場合によってはムード音楽をともに流す展示場もあり得よう。火山コーナーで、地鳴りや爆発音の疑似体験用効果音と大差ない扱いであり、両側からもその評価が接近してきているのである（濱田, 1994）。

このように、社会動向全般の流れと、それに沿ったコンセプトの発展に加えて、展示技術の高度化・多様化が、博物館展示のみならず、博物館が果たす全体機能に大きな変化を生ぜしめてきたことは疑いもない。さらに、ユーザー側の年齢、職業、来館目的の多様化がからんで、博物館は仮に主展示アイテムが限定された単科的展開をしているのであっても、館のトータルな在り方は、総合博物館と似たりよったりのオムニバス対応にならざるを得なくなっているのである。

展示だけでなく、いわゆるサービス機能としてのミュージアムショップや飲食・休憩施設にもこうした全体性に果たす役割があることは言うまでもない（図8）。とりわけ、館にかかわるユーザー主導の立場が強くなる

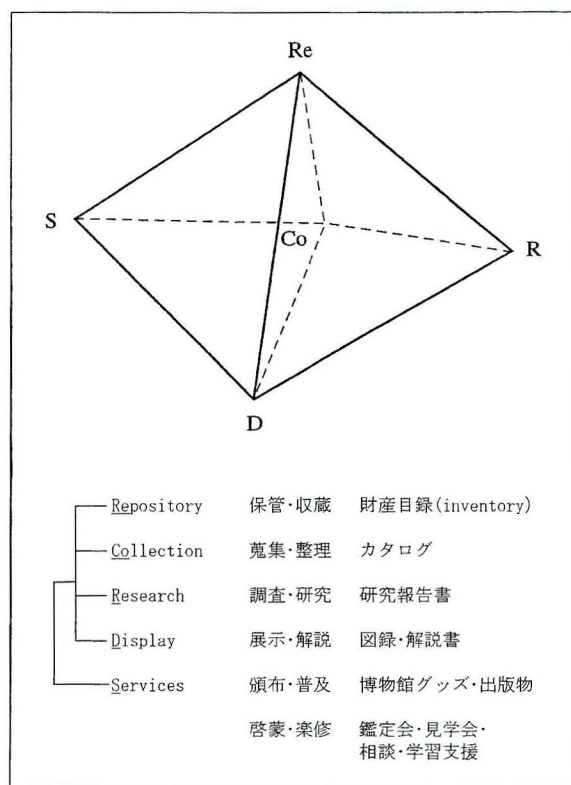


図8. 博物館機能テトラヘドロン。

されるべき場として、その環境メニューの多彩化は、いわば不可欠と言えよう。その意味ではわが国博物館での対応の遅れは否めない。例えば、来館者の多くにとって、博物館を“見てまわる”以外の“お土産探し”を楽しむ“ミュージアム ショッピング ムード”をもっと大切に受け止めるべきであろう。この点は水族館関連施設に多少の先進性が出ており、かなり参考になる。

知的サービス機能としてのメニューの多様化も当然である。電子機器類による情報提供はもちろん、face to faceでの指導やQ & A対話サービスが大きな意味を占めるのは当然である。展示ガイドにその意義が集約されるわけであり、専門学芸員でなくても、コンパニオンやボランティアの館内ガイドツアーが持つ、館全体機能への貢献度は著しく高い（奥野, 1998a, b, 1999a, b, c）。

アウトリーチとしての館活動による地域サービス、学習支援サービスの多様化は、いわゆる現代型博物館の大きな特性と言って差し支えない。自然史関係で言うと、ハンズ・オン思潮の延長としての野外観察、野外実習、出前指導、ローンキット、講演、相談等々、広い活動範囲があり、これは学芸員の専門性がフルに発揮されなければならない局面であるだけに、これまで自己の研究に打ち込んでいた時間をどうしてもその方面にさくことになり、学芸員側にとってみれば負担過重の意識も生じようが、一つの大きな社会的要請であるから、これからはずれることはできまい。生命の星・地球博物館ではこのような事情に応じて「館員の活動の及ぶ範囲が博物館」という位置づけを行い、館全体業績向上にその多様なメニュー提供が大きな役割を果たすことをを全員で認知する方策をとっている。

VI. グローバリゼーションと地域意識

1. 地球環境理解への指針

言葉だけからすると、「地球環境理解」には二つの局面が存在する。一つには、現在、世界中で全ての人々の重大関心事となってきた地球環境問題について理解する、という立場である。人類がその文明化に伴って気付かぬうちに周辺の地球環境に大きなインパクトを与え続けてきた結果、その人類自身にとって深刻な環境悪化がもたらされており、事態が一向に改善される気配が見えない状況がある。そうした原因がヒトの社会的行為にあることを考えると、地球環境問題とは、事象そのものは自然科学的な要素を多々持つてはいるが、実は、政治・経済問題にはじまり、日常生活様式に至る全ての人間活動の複合的課題と認識されねばならないものと断定できよう（道家・新飯田, 1999）。

一方では「地球環境理解」が、地球の過去から現在までの長い歴史をふまえた環境変遷史の理解である、という地球科学での主題として古くから存在し、論じられてきている。ところが、この局面はむしろ人類の関与とかけ離れた自然界の問題として位置づけられてきたきらいがあり、あまり世間では認知されていない。もちろん、本来はこの方の歴史的地球環境研究があって、初めて正しく「問題」の本質が理解できるのであるから、第2の視点を忘れてはならず、両者のバランスが重要な方針決定に関与しなければならない。

グローバル時代であるから情報の量や流れのシステムは整備されてはきているものの、生涯学習のように自らの意志と手法で自己啓発・自己発展を目指す人にとっては、地球環境についてより深く知りたいという欲求が満たされない状態に置かれているのが現状だと言えそうである。学習の場も機会もほとんど整備されていないからである。いくつかの大学の公開講座とかカルチャーセンター講演、散発的に催される個別のシンポジウムや講演会等はあるが、また、放送大学にも講義科目もあるのではあるが、ニーズに応えきれていない。それには問題が巨大であり、正真正銘の複雑系だからという理由もあろう。

その点、博物館とりわけ自然史型の博物館には望みがある、と言ってよからう。もちろん、網羅的あるいはシステム的な学習を期待することはできないが、多彩な素材アイテムやメニューが用意され得るから、好きなアプローチからの切り込み、独自の地球観、生命観を得て、地球環境変遷史や地球環境問題の理解へのきっかけづくりとすることが十分に可能な場であり、メディアであるからである（小出, 1997a, b）。

地球規模での環境理解は、単科的な学習ルートでは見えてこない。旧来の専門分野を超え、発想の異なる考え方、歴史慣習、宗教等の要因にも関心を抱くことが第一歩とも言える。地球環境問題への現在の対応、対策をみても、具体的には対症療法的な手段しかとり得ておらず、政治的な動きとか流れは“地球環境サミット”から伝わってくるものの、一向に効果が見えてこないことが事の困難さをよく示している。

欲求達成にパワーを持ち、欲求水準を下げるための

“歯止め装置”を失った人類にとって、確かに危機的状況が生まれている。しかし、人類自らの生活へのデメリットと受けとめる風潮には大きな問題点が含まれている。すなわち、「人類のための」環境についての課題という、極めてエゴイスティックな捉え方に偏っていて、他の圧倒的に大きな地球環境構成員である生物群に対してほとんど配慮しない状態を長らく続けてきたからである。ヒトは、“地球生物”を外れてしまっているという感すらある。生態的に食物網を形成せず、経済行為という不思議な手段で自らの摂食行為を失ったあげく、ポピュレーションの維持にも失敗した「反地球型」生物になり下ってしまった、という事態の認識こそが、地球環境や地球環境問題を考える大前提とされなければならない。

このような“人間観”、“社会観”、“地球観”は、従来の学問分野の上に成り立つ教育の流れの中からはなかなか育ちににくい。もっと地球を知り、地球を理屈からでなく、体感的に知るプロセスを大切にしなければならないことは言うまでもなく、そこに自然史博物館のもつ役割が見えてくるのである。あくまで問題解決型でないとしても、問題認識のためのきっかけづくりとしての博物館の重要性を指摘できよう。この件は、ユーザーとしての来館者の意識の向上の問題と共に、館サイドの深い理解と目的意識・問題意識のレベルアップがなければ達成できないものであることも言うまでもない（濱田・小林, 1999）。

「ヒト社会と地球」という課題は、非常に多彩な局面を持つのが当然で、“公害”的にヒトの被害意識のみを強調する姿勢では到底カバーしきれないし、本質をつかみ得ない。地球環境の問題は、確かにグローバルな視点・視座に立って考え、扱う必要があると共により具体性をもった一つ一つの生きものの生息条件、地形・植生の変化、大気・水の循環事情などをトータルに眺め、しかも反省を込めたヒト側の発想と対応が不可欠であろう。

博物館は環境問題のシンクタンクでもなく、アセスメント企業でもないし、もちろん、対策機関でもない。そして、社会的に考えると、“教育的機能”からすれば、生涯学習という自由度の高い知的向上のための唯一のメディアであると言ってよい。そうした視点からの博物館論では、情報集約機能一つをとってもこれからのグローバル化時代にあって、一般社会人のための中核的な機関として作用しなければならないという近代的な指針に到達すべきものと考えられるのである。

ちなみに、グローバル化というコンセプトと、すでに広く通用している国際化という捉え方との間には、事態の広がりという点では、ほぼ共通している。見て差し支えあるまいが、どちらかと言えば、前者は意識のレベルでの問題であり、後者はより具体的な行為にまで及ぶものと考えてよからう。したがって、前者には強制的・制度的なニュアンスはあまりなく、後者には評価や方針を含めた方向性を示すニュアンスが強い、という理解が成り立つものと考えられる。拡張すれば、国際化はグローバル化の手法であり、方針であり、流れの一部を表すものとしてよからう。

グローバルという表現に関連して、「神奈川県立生命の星・地球博物館」の名称の意義について一言ふれておこ

う。この館のスタートは神奈川県立博物館の名で始まり、再編整備構想が進展して、人文系部分を旧来の横浜市に残し、新しい自然史系博物館を目標として小田原市に設立された際に決定されたものである。英名では継承性を重んじ、Kanagawa Prefectural Museum をそのまま使い、その後に Natural History としてある。日本語表記での「神奈川県立生命の星・地球博物館」は、条例に定められた正式機関名ではあるが、その直接翻訳の英名はない。

このような中間的な名称取扱上の措置には、いくつか先例がある。例えば、かつて「東京大学総合研究資料館」の英名を (Tokyo) University Museum としたのは、当時の法制上国立大学には博物館と名乗る施設は置けなかったという事情による。とはいえ、実質上に世界の大学・研究所に対してひけをとらない博物館的内容と機能を有している以上、対外的には Museum であるべき、とする大学の意向を表明したいからである。

「神奈川県立生命の星・地球博物館」の名称は、“地球・生命”をコンセプトとした自然系博物館構想を踏まえ、博物館開設準備室において種々検討した結果、最終的に「神奈川県立の博物館条例」により定められたものである。開館してから内部でこの名称の使い勝手に関して非公式の議論があり、長すぎる、奇をてらったとみられるのでは、地球時代におもねた命名と言われないか、といった意見も出た。開館5年を経た今日、社会的にこの館名の意義を客観として捉えてみるのも良いことと考えられる。

展示の流れや館のコンセプトは、間違いなく「生命を育んだ惑星—地球」におかれているから、館名はまさにぴったりであり、第三者に時に語順や用語を間違えらる不具合はおこるが、なべて好評をいただき、時に「時代の先取りでしたね。素晴らしいです。」というほめ言葉もいただく。地球環境問題の時代といえど暗いイメージがあるが、グローバル、生命、地球環境の話にはそうした影はない。この現代的なグローバリゼーション時代、しかも地球環境へ熱い眼差しが向けられているこの時、確かに「神奈川県立生命の星・地球博物館」の名称は整合性、時代性に秀れていると思われる。

館内常設展のストーリー展開は、とりわけその導入部において、NHK スペシャル「地球大紀行」のシナリオ的映像情報が多く採択されていることもあり、かつてはNHK頼りの企画ではないかという軽い批判も出たようであるが、時期的にも「地球大紀行」製作時からかなり経過し、その後の学説の進歩やデータの増加をフルに採り入れているので、ニュアンスとしては「地球大紀行」

発展版という印象を持たれても構わない。

世界の博物館を見渡して、未だに他に「地球」を名乗り、その生い立ちやそこでの生命活動をまともにとり上げ、しかも地球環境問題にまで普及したものは他にない。その意味で、できることならば、愛称としてでもこの英訳を用意し、もっと積極的に世に問うことが文化史的にも意義が大きいと思われる。ちなみに仮に英名をとるとすれば、Museum of Life Planet - the Earth - とか、Museum of the Earth - our Planet with Life - といったところであろうか。館スタート時のキャッチコピー「つまり、ミニ地球ってことなんです！」の主旨を伝えたいものである (図9)。

2. 地域社会への浸透

博物館は当然地域に向かってできる限り広く門戸を開放していることが望ましい。生命の星・地球博物館は、設立時の経緯からしても小田原市と神奈川県との協調事業としての立場にあるので、非常に広い接触面積を有している。県や市の集合で少しでも地球、自然や環境に関連するものであれば、館として積極的に共催あるいは後援という措置をとっている。

文化事業についても開かれており、チェコスロバキアの少年少女合唱団と小田原市の少年少女合唱団との合同演奏会は、館入口のホールを舞台に展開され、高く評価された例もあるし、「風と土のサロン」「サロン・ド・小田原」と愛称される交流会や周年記念コンサート等にはいつも地元の方々が多数集う。これらの会の前提として、地球環境や教育・観光政策等をテーマにした講演や対談が組まれていることは、地域博物館としての責務でもあり、貢献でもあり得ると自認している。

ちなみに、小田原市側からの積極的な協力姿勢の表れとして、館長の濱田には「小田原城下町大使」の任を付与して下さり、折りにふれて館の立場を各方面に紹介していただけると共に、小田原市のホームページに当館のページを用意していただいている。結果として、地域との大切なパイプの役目が果たせていると思われる。

博物館は本質的に地域社会に立脚しているものであり、地域を無視して存立するわけではない。その地域依存性を考える時、当然、行政的局面と地理的ないし生物地理的局面の二つがあることを、バランスよく考慮しなければならぬ。行政的な関係のみに偏して、上述のような地域交流に重点を置いて、あるいは地域地質や地域生物相についていかに貢献しようともその一方だけでは博物館の機能が発揮されているとは言えない。加えて、近年のグローバリズムの大河の中に存在する以上、よく言われるように、Think globally, act locally の思潮、立場もまた大いに尊重しそれに整合的な汎地球的視野を持つことも必須である。追ってもう一つのフレーズ and perceive individually を加えるのがよい。この三者のバランスのどれ一つが欠けても、本当に開かれた近代型博物館の資格はない、と断じられても仕方あるまい。

地域的な現象を常設展に配し、特別展にも地域的な色合いの濃いテーマを度々選ぶのも博物館活動の大切な館運営方針である。館独自のイベント以外にも、類似の立場



図9. 生命の星・地球博物館シンボルマーク。

を鮮明に打ち出すことが十分に可能である。その一例を、生命の星・地球博物館がとりまとめている“ミュージアム・リレー”なる活動につなげた、愛称ウエスカムズ(WESKAMS; 神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会)という団体について紹介しておこう(濱田, 1999e, f, g)。

生命の星・地球博物館が発足した翌年、小田原市のみならず関係の深い箱根町を含めて数多く存在する西部地域の博物館や相当施設と連絡をとりあい、互いに情報交換することによって少しでも広い博物館活動につなげよう、と呼びかけたことに始まった。最初は、情報交換を主とした館園長会議的な位置づけが強かったが、具体的に活動もやってみようという発想から持ちまわりで各館園で行事を、という方針に移行していった。やがて“ミュージアム・リレー”という名称の毎月の行事として定着し、最近では1年先の予定まで埋まってしまう過熱ぶりである。参加館園も46にまで増加し、その所在も神奈川県に限定されることなく静岡県にも浸透している。複数館園共催のケースもあり、非常に自由度の高い内容で展開されている。参加者は博物館関係者やその周辺の“定期的メンバー”だけでなく、公募による一般参加者も加わるので、時間差をとったグループ・ツアーないしは“ハンズ・オン ツーリズム”型案内となることも珍しくない(濱田, 1999b)。

こうした“非公式”・“自前型”のイベントに対し、地域社会対応性という点で、思わぬ局面が発現した。それは、いわゆる「不登校生」が彼らを世話しているフリースクールタイプの学園が授業の一環として集団参加することになり、それがすっかり定着してしまったことである。普通は1学年、時には全学年160名近くが訪れることもあり、別に時間差・帯を設けて案内、という嬉しい事態への展開となったのである。彼らの愉しげな態度や節度に周辺の参加者は「不登校生」などとは夢にも思わないに違いない。事実、館園の立場から見ても、社会がどうして彼らを「問題生」扱いするか疑問と戸惑いを感じざるを得ない事情がずっと続いている。

ウエスカムズの立場としては地域社会、生涯学習といったキーワードをほとんど意識しないままに発生したこの素晴らしい人と人との触れ合いの場の提供に自信と誇りを抱くに至っているのが嬉しい。国費も県費も館自体の負担も全くない、主催者も参加者も任意のイベントが結果として最も望ましい“ゆるやかなつながり”の“切れない”関係を創り出したことは、旧来の博物館の在り方の常識をはるかに超える事態であり、普遍性にまではつながらないとしても、貴重な一石を投じることになったと考えている(奥野他, 2000)。

先にも述べたが、生命の星・地球博物館では上記とは別の異なった立場として、文部省からの委嘱事業「科学系博物館活用ネットワーク推進事業」の一端を担いながら地域社会での子どもを中心とした親・先生・館園の協力によるプロジェクトに参画している。一種のモデルづくり事業として、全国で8ブロックが指定され、そのうちの「南関東地域科学系博物館ネットワーク推進事業」におけるコア館の一つとして機能している。

この事業の狙いの一つには、博物館事業に関わる国費



図 10. みなかんネットワーク大会。a: 落ち葉、木の
実、スコリアで工作。b: 小さな鉱物の顕微鏡観察。

の配分を科学研究費的に県境をはずし、大学卒・研究室卒等の制約から解放して、直接「ネットワーク推進協議会」に対して行なう、というところにもある。3か年で計1億6,360万余円が投入され、コア館の他の一つの江ノ島水族館を中心とした“水系”と、生命の星・地球博物館が世話する“大地系”の二つの流れで24の個別事業に力を注いでいる。これは言うまでもなく学校週5日制対応への一つの模索行為であり、成果をまとめて文部省に報告し、提案も行なうことになる(濱田, 2000b)。

このような事業は、当然のことながら館園の特性と地域特性とを十分に活用し、学校外学習支援にある程度の普遍性を有することが期待されると共にテスト期間のみならず、将来にわたっても継続可能なネットワークづくりを旨とするのが本来の姿であろう。ネットワークの定義や理解は様々であろうが、普遍的手段としてのホームページをはじめとする電子情報ネットワークと共に地域の特定の人々の face to face, from hands to hands を原則とするネットワークを活性化し、そのバランスを図ることが大切となろう(図10)。

野外活動や実験・実習は、またとないハンズ・オン学習のチャンスであり、先生や親と子どもたちが一体となって五官を使った体感経験を積む場を用意する口火を各博物館がきるのであり、古くから企画や行事にやや孤立性の強さが指摘されていた博物館・園の在り方にとって、良い刺激となっていて、近代型の開かれた博物館コンセプトを豊かにすることにつながっている。さらに自然学習にあっては、教師は先生や親、学芸員、ボラン

ティアの人達だけではなく、「自然そのもの」が偉大な教師、という受け止め方に誘うことができ、まさに博物館の学習支援の方針に添うものとなるに違いない。

将来は、自然科学系、科学系博物館のネットワークだけでなく、もっと幅広く美術館や動・植物園を巻き込んだ、ゆるやかで楽しい学習支援体制が全国に多発することが期待されよう。企業体や自治体の理解が深まれば、さらに幅のある活動に展開できよう。そのような場合、子どもたちの関心のきっかけづくりが大きな鍵となることは言うまでもなく、その志向に効用の高いエデュテインメント要素を十分にとり込んだプロジェクトが展開されるところとなるにちがいない(濱田, 1999a, 2000a)。

VII. あとがき

21世紀での博物館がいかにあるべきか、という問いには、理念的かつ定式的に発生しては消えてゆく世紀末から新世紀初頭での問題意識という冷めた捉え方もある。日本での事情をよく眺めてみると、社会的課題があまりにも多くて、一般人にとってみれば、博物館の運営方式がどうなろうと、博物館界の考えがいかに先進的であろうと、殆ど意識に留まらない事柄であるに違いあるまい。結果として、愉しく生涯学習に役立つ機能が見えてくれば、それを大いに利用するという現実的な立場が貫かれるであろう。

目前の大問題として公的博物館のエージェンシー化という流れがある。行政改革のあおりを受けてのことであるが、形式的に省力化、簡素化、官制比重低下等を目的に実施するデスクワーク的な発想が根底にあるとすれば、組織替わりといった単純な問題ではなくなる。本来、博物館のレベルの高さは国の文化レベルの反映とされるのが“先進諸国”の社会的常識である。そのレベル向上には、物質的生産性が殆どない博物館界をどう育て上げるかという社会のバックアップ体制と深い理解に加え強い意欲がなければなるまい。

大学教育に対する政治のイージーな考えも軌を一にしている。人員削減が大学にとっていかなる意味をもち、企業体のリストラ、合理化策といかに異なったものであるかを吟味する前に処置が進行してゆく。博物館界にも同じ種類の“リストラ”風が吹き流れるであろうが、独立採算の見込み薄の性格を本来持っているこの世界には、“効率”だけしか頭がない人々には、「入館者の少なさ」＝「館の魅力のなさ」＝「社会的有用性の低さ」という等式が成り立ち、“自滅”的経過がシナリオとなろう。1999年4月6日付け朝日新聞夕刊の文化欄での網野善彦氏の指摘「博物館等の独立行政法人化転換期こそ長い目で」は正鵠を得ている。

博物館界が真の生涯学習の力強いメディアとなり得るポテンシャルを有することは随所に述べてきた。たしかに「容れ物」造りに熱中した部分もなかったわけではないが、これからの博物館界がそのリベラリズムをフルに発揮し、制度教育の不備を補い、さらにその枠をはるかに超えて子どもたちに楽しい学習環境を提供するものとして「博物館楽修」方式を樹立し、その地域社会に貢献する立場をとるならば、それこそが本当の博物館界生き残りの

道であるといえよう。要は生活文化に根ざした知の世界の涵養・構築にかかわるユニークネスとパブリックサービス機能とが21世紀を担うフレッシュ・ミュージアム実現の鍵となる(濱田, 1999a, 2000a; 濱田・奥野, 2000)。

国内だけでの独りよがりな博物館のあり方は、グローバル化の今日、発展性を欠くであろう。国際的文化水準の向上とはよその国の類似を求めていることではない。日本のオリジナルな独自性をグローバルに伝えることの方がむしろ主体となるべきであろう。博物館界あげての人材交流や地球規模巡回展を旨とするのもよからう。「博物館の文化レベルは国の文化レベル」という表現はそのままにおくとしても、その内容は国の権威での、ではなく、大衆の文化レベルでの、と読みとられるようになりたいものである。

VIII. 文献

- 道家達将・新飯田宏, 1999. 地球環境を考える. 放送大学教材 28027-1-9911, 日本放送出版協会.
- 古瀬浩司・瀬能 宏・加藤昌一・菊地 健, 1996. 魚類写真資料データベース (KPM-NR) に登録された水中写真に基づく八丈島産魚類目録. 神奈川自然誌資料, (17): 49-62.
- 濱田隆士, 1994. マルチメディアとエデュテインメント CG教育最前線 NICOGRAHPH, 94. 第2回CG教育シンポジウム The Electronic School プロシーディングス, 19-23.
- 濱田隆士, 1996. 近代自然史(誌) 博物館の特性と将来像. これからの自然史(誌) 博物館—生命の星・地球博物館1周年記念論集—, 29-52. オールプランナー, 小田原.
- 濱田隆士, 1997. 情報化時代の自然史博物館. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (26): 27-35.
- 濱田隆士, 1999a. 21世紀博物館を読む. 博物館シリーズ1, 博物館概論特論2, pp. 179-190. 樹村房.
- 濱田隆士, 1999b. ハンズ・オンツーリズムへの展開—生涯学習時代における記念物活用の方途. 文化庁月報, (11): 7.
- 濱田隆士, 1999c. 博物館での自然史学習—ハンズ・オン思潮を基本に. 自然史学会連合・日本学術会議50周年記念・合同シンポジウム「博物館の21世紀—ナチュラリストの未来」講演要旨集, 17-21.
- 濱田隆士, 1999d. 開かれた博物館への更なる努力を. 神奈川県立生命の星・地球博物館年報, (4): 1-2.
- 濱田隆士, 1999e. 巻頭言「発刊によせて」. WESKAMS, 1(1): 1.
- 濱田隆士, 1999f. 博物館・園とニュー・ツーリズム. WESKAMS, 1(2): 1.
- 濱田隆士, 1999g. 平坦でない“開かれた”博物館への道. WESKAMS, 1(3): 1.
- 濱田隆士, 2000a. ユニバーサル・ミュージアムへの志向と試行. 神奈川県博物館協会会報, (71): 3-14.
- 濱田隆士, 2000b. エデュテインメント性豊かな学習プログラムの構築—南関東地域での事例—. 第7回全国科学博物館協議会研究発表大会〔国際シンポジウム〕(名古屋市科学館) 資料, 15-18.
- 濱田隆士・小林達雄, 1999. どのくらい館に寄与していますか? 大地球を感じさせるリーダーシップ. 小林達雄対談集, ミュージアムの思想, pp177-188. ミュゼ.
- 濱田隆士・奥野花代子, 2000. ユニバーサル・ミュージアムをめざして—神奈川県立生命の星・地球博物館の取り組みとトッキングサイン・ガイドシステムの開発・導入について—. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (29): 127-136.
- ヒルゲンドルフ展企画実行委員会, 1997. 図録日本の魚学・水

- 産学事始め フランツ・ヒルゲンドルフ展. 73pp. ヒルゲンドルフ展企画実行委員会.
- 神奈川県教育委員会, 1988. 県立博物館整備構想調査報告. 241pp.
- 神奈川県立博物館, 1991. 鮮新統中津層の古生物. 神奈川県立博物館調査報告 (自然科学), (6): 170pp.
- 神奈川県立博物館, 1992. Garard Ramon Case 軟骨魚類化石標本目録第1集 古生代軟骨魚類化石. 神奈川県立博物館資料目録 (自然科学), (6): 112pp.
- 神奈川県立博物館, 1994. Garard Ramon Case 軟骨魚類化石標本目録第2集中生代・新生代軟骨魚類化石. 神奈川県立博物館資料目録 (自然科学), (7): 136pp.
- 神奈川県立博物館整備構想懇談会, 1988. 神奈川県立博物館整備構想に関する提言—自然系博物館・人文系博物館の基本的な考え方—. 17pp.
- 神奈川県立生命の星・地球博物館, 1997. 櫻井欽一コレクション標本目録第1集化石. 神奈川県立博物館資料目録 (自然科学), (10): 106pp.
- 神奈川県立生命の星・地球博物館, 1998. 酒井 恒博士寄贈カニ類標本目録. 神奈川県立博物館資料目録 (自然科学), (11): 67pp.
- 神奈川県立生命の星・地球博物館, 1999a. 特別展図録カニの姿—酒井コレクションから—. 64pp.
- 神奈川県立生命の星・地球博物館, 1999b. 神奈川県立生命の星・地球博物館年報. (4): 76pp.
- 神奈川県立生命の星・地球博物館化石ローンキットグループ, 1998. 中津層の化石をしらべる—中津層産化石資料の教材化—. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 48pp.
- 小出良幸, 1999a. 地球科学と教育を取り巻く現状分析—博物館の新しい地球科学教育を目指して1—. 地学教育, **52**: 127-147.
- 小出良幸, 1999b. 地球科学と教育を取り巻く現状分析—博物館の新しい地球科学教育を目指して2—. 地学教育, **52**: 169-176.
- 小出良幸・平田大二・山下浩之・新井田秀一・佐藤武宏・田口公則, 1998. 新しい地球科学の普及をめざして—だれでも使える博物館—. 地学雑誌, (107): 844-855.
- 小出良幸・平田大二・山下浩之・新井田秀一・佐藤武宏・田口公則, 1999a. 地球科学と教育を取り巻く現状分析—博物館の新しい地球科学教育を目指して3—. 地学教育, **52**: 213-222.
- 小出良幸・平田大二・山下浩之・新井田秀一・佐藤武宏・田口公則, 1999b. インターネットのリンク・データベース—自然史博物館, 理科教育, 地球環境, 障害者, 地球科学に関するリンク集—. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), (28): 109-126.
- 木村陽二郎, 1985. 白井光太郎著作集第1巻—本草学史研究—. 科学書院. 434pp.
- 小泉 丹, 1943. 日本科学史私攷. 岩波書店. 497 + 5 + 11 pp.
- 奥野花代子, 1998a. 座談会目の不自由な人のための優しい博物館のありかたを求めて. 博物館研究, (33): 20-23.
- 奥野花代子, 1998b. 全国の博物館園における視覚障害者の対応に関するアンケート調査結果報告. 神奈川県立博物館研究報告書自然科学, (27): 95-106.
- 奥野花代子, 1999a. 全国の盲学校の博物館利用に関するアンケート調査. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), (28): 127-136.
- 奥野花代子, 1999b. 博物館における視覚障害者への対応について—全国の主な博物館園のアンケート調査結果及び当館の事例—. ユニバーサル・ミュージアムをめざして—視覚障害者と博物館—県立生命の星・地球博物館3周年記念論集, 15-21. 神奈川県立生命の星・地球博物館.
- 奥野花代子, 1999c. 多様な要請に応えうる魅力ある展示づくりを求めて. 全国博物館大会シンポジウム要旨集, 5-7. 日本博物館協会.
- 奥野花代子・青木達雄・町田達哉・濱田隆士, 2000. 地域博物館ネットワーク運用の一形態—ミュージアム・リレーの2年間より. 日本ミュージアム・マネジメント学会紀要, **4**: 23-37.
- 奥野花代子・濱田隆士. (印刷中). バリアフリー博物館からユニバーサル・ミュージアムへの過程. 博物館学雑誌.
- Ozaki, K., 1991. Late Miocene and Pliocene Floras in Central Honshu, Japan. *Bull. Kanagawa pref. Mus. (nat. Sci.)*. Special Issue, 244pp.
- 瀬能 宏・御宿昭彦・反田健児・野村智之・松沢陽二, 1997. 魚類写真資料データベース (KPM-NR) に登録された水中写真に基づく伊豆半島大瀬崎産魚類目録. 神奈川自然誌資料, (18): 83-98.
- 瀬能 宏・牧内 元・武谷 洋, 1998. 魚類写真資料データベース (KPM-NR) に登録された水中写真に基づく熱海産魚類目録. 神奈川自然誌資料, (19): 19-28.
- 白井光太郎, 1908. 増訂日本博物館学年表. 丸善. 220 + 36 pp.
- 田口公則・大島光春・樽 創・今村義郎, 1999. 博物館と学校の連携による化石資料のインタラクティブ活用. 博物館学雑誌, (25): 35-39.
- 館野聡子, 1992. 画像による生物体内外の流れの可視化. 月刊海洋, **24**(8): 512-519.
- 矢島道子, 1998. フランツ・ヒルゲンドルフ展を終わって—巡回展の試み—. 地学雑誌, (107): 872-878.

摘 要

濱田隆士・高橋俊雄・松島義章・奥野花代子, 2000. 博物館と社会的機能. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), (29): 33-52. (T. Hamada, T. Takahashi, Y. Matsushima & K. Okuno, 2000. Museums and Their Social Function in Japan. *Bull. Kanagawa prefect. Mus. (Nat. Sci.)*, (29): 33-52.)

神奈川県立生命の星・地球博物館は、2000年3月20日をもって開館満5周年を迎える。旧神奈川県立博物館を再編整備し、自然史博物館の性格を明確にした近代博物館として、基本的に“開かれた博物館”を目指して運営されてきた。この“開かれた”という言葉の持つ意味の重みと深みをここで今一度吟味し、社会と博物館との関係を明確に意識することを目的とした。本論では博物館の在り方を一般論議を背景にしながら、収集標本の抱える諸問題、地球自然史保全とのかかわり、生涯学習と博物館活用、バリアフリー施策からユニバーサル思想への進化、ハンズ・オン思潮について、当館発足以来の足跡をたどりながら述べた。さらに学芸員・館長が抱えるわが国の博物館界の課題にもふれ、今後の活動のあるべき姿として多彩なメニューの提供、つまり社会に対する博物館の知的サービス機能、グローバリゼーションと地域社会の問題としての地球環境理解への指針、博物館理念とその地域への浸透などの諸局面についても記した。博物館のもつ社会的機能と同時に博物館を支える社会の役割に関して、これまでの反省を込めながら、ミュージアム・マネジメント意識の高揚と斯界の今後の発展を期すべく立場の異なる4名で論述した。

(受付: 2000年1月10日; 受理 2000年1月20日.)